

# jFUNU Newsletter

公益財団法人 国連大学協力会  
〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70  
TEL 03-5467-1368 FAX 03-5467-1349  
URL <http://www.jfunu.jp/> E-mail [jf@unu.edu](mailto:jf@unu.edu)

- 国連大学大学院 2 期生が入学 P1
- インターン生が見た聞いた国連大学 P2 - 3
- アクティビティ・レポート P4

## UNU-ISP 大学院第 2 期生として 12 名が入学

2 年目を迎えた国連大学大学院サステナビリティと平和研究科の学生募集にあたっては、世界各地より合計 283 名の出願があり、そのうち日本人 1 名を含む 12 名が合格しました。

9 月 12 日に行われた入学式には、他に国連大学高等研究所 (UNU-IAS) の大学院学生、国連大学短期集中講座の受講生も交えて、約 60 名の学生たちが参加。

彼らを前にして武内和彦副学長は、「次世代を担い、地球規模課題の解決に立ち向かう人材となって欲しい」と激励しました。

jFUNU では、昨年度に引き続き、大学院サステナビリティと平和研究科 2 年生 2 名に住友化学株式会社ならびにトヨタ自動車株式会社からの冠奨学金を支給。また新たにパナソニック株式会社から冠奨学金を新入生 1 名に支給する他、複数企業から共同で新入生 1 名に奨学金を支給します。



国連大学スタッフ、大学院新入生、短期集中講座の学生、来賓の方々

### 東日本大震災緊急支援募金 第 2 回の配分先を決定しました

国連大学協力会 (jFUNU) 「東日本大震災緊急支援募金」に、皆様から温かいご支援を頂戴しておりますが、過日第 2 回の配分先を決定し、下記団体へ 25 万円の寄付を行いました。

団体名	特定非営利活動法人 田んぼ
代表者氏名	岩淵 成紀
所在地	宮城県大崎市田尻大貫字荒屋敷
活動内容	当該法人を中心に進めてきた気仙沼本吉町大谷地域の津波被災水田復元事業では、市民と地元農民の力によって、約 2 週間の間に 1/100 のランクまでの土壌の脱塩に成功し、現在復興したこの水田地域のイネは塩害もなく順調に育っている。この技術の基本となる考えである「ふゆみずたんぼ」は、当法人が中心となって各地でその技術を紹介してきた。 現在、同法人は、水と生態系そのものが持つ力のみを利用し、塩害対策と生物多様性の向上を同時に解決するための活動を宮城県内 5 カ所で行っている。また、今後この実績をもとに被災地の水田を復興する有力な手段として国内外に提言する予定である。

#### jFUNU Lecture Series 4

グローバル化した保健と医療

アジアの発展と疾病の変化

国連大学協力会では、昨年 7 月に九州大学、国連大学との共催により、「グローバル化した保健と医療 - アジアの発展と疾病の変化」とのテーマでシンポジウムを開催しましたが、このたびその内容を編集・収録した上で、「jFUNU レクチャーシリーズ 4」(加来恒壽編・国際書院)として出版いたしました。

ご希望の方に本書を送料とも無料で差し上げます。お申し込みは、氏名、住所、電話番号を明記のうえ、E-mail [jf@unu.edu](mailto:jf@unu.edu) か FAX 03-5467-1349。先着 3 名まで。



# インターン生が見た聞いた

**国**連大学協会 (jfUNU) では、毎年夏の10日間、早稲田大学からインターン学生を受け入れています。

これは、早稲田大学キャリアセンターが、同大学生のキャリア形成支援を目的として実施しているインターンシッププログラムを通じて行われるもの。jfUNUでは2007年より同センターと提携し、「国際協力コース」における受入れ機関となっています。

今年は、8月26日から9月12日まで、同大3年生の石川哲生君と2年生の陳利揚さんが本法人で就業体験を持ちましたが、研修期間中に行ったインタビューレポートを掲載します。

## 教えることによって学ぶことも多い



ベセリン・ポポフスキーさんインタビュー

■取材：早稲田大学教育学部3年生 石川 哲生

■構成：jfUNU

大学院を開設し、研究機関から本格的な教育機関として装いを新たにした東京の国連大学 (UNU)。大学院運営や学生指導の中心的立場にあるUNUのシニア・アカデミック・プログラムオフィサーであるベセリン・ポポフスキーさんにインタビューしました。

——これまでの経歴を教えてください。

**ポポフスキー**：私の最初のキャリアは、ブルガリアの外交官としてスタートし、1988年から1996年まで、いろいろな場所に赴任しました。当時の世界情勢は、イラクで湾岸戦争が発生する一方、ユーゴでは深刻な内戦などが起こったりして、そうした地域の混乱の場面に遭遇・直面しました。その過程で私は、外交官として国連安保理の決定をいろいろと分析しているうちに、安全保障や人権の問題について、洞察を深めるようになりました。

その後外交官を辞め、NATOの研究員を勤めるかたわら、論文を書いてPh.Dを取得し、研究者となり、イギリスのエクセター大学で人権や安全保障について教えました。この時期、多くの著作も出版しています。

——国連大学に来られたのは

**ポポフスキー**：エクセターに続くキャリアとして国連大学を選んだのは、外交官として経験してきたことと学問で追究してきた経験とを統合してみたいと考えたからです。当時の私には国連大学は、そういう試みを実行する場としてちょうどぴったりのように見受けられました。実際入職してみて、理想的な環境であることを実感しています。

——日本と祖国ブルガリアをどのように比較されますか？

**ポポフスキー**：日本滞在中も長くなりましたが、全般的に日本の方がブルガリアよりも生活しやすいことは明らかです。ブルガリアも10年前と比較すれば、状況は良くなっていますが、未だにヨーロッパにおいては最貧国のひとつ

に属し、人々の生活水準も低い。課題を大きく抱えているといっていでしょう。人権の面では、ロシアより状況は良好ですが、他のヨーロッパ諸国ほどではない。

しかし、ブルガリア人というのはとても素直で、列車に乗り合わせれば、つい隣の人とおしゃべりしたり、ものをシェアするような人懐っこい国民性があります。日本人とは逆ですね。私も日本に長くいて、少しシャイになったかな。

日本ではブルガリアというと、最も有名なのは相撲の「琴欧州」、その次が「ヨーグルト」。まだまだ知名度が低いですね。

——研究テーマについて教えてください。

**ポポフスキー**：国連大学では、従来「開発と環境」と「人権と安全保障」の2つの大きな分野で研究を行ってきましたが、ISPではそれらを「サステナビリティ」という統一テーマのもとに、「地球変動」「国際平和と安全保障」「国際協力と開発」という新たに3つのカテゴリーに再編し、これらを軸にグローバルな課題の解決を目指します。おの

ずと自分の研究分野もシフトすることとなりました。人権や安全保障の問題を災害や地球環境の変化、あるいは人為的な作用とからめて考えています。ISPでは、こうしたマルチアプローチな形で地球規模課題の研究を行います。他の大学院の教育体制では見ることができないと思います。個別の問題だけを追究したいのであれば、日本の他の大学院に進む方がいいでしょう。

——UNUの大学院生たちをどのようにご覧になりますか？

**ポポフスキー**：素晴らしい学生ばかりです。少人数の対面方式で教えることによって、学生から積極的な質問を受けるチャンスが生まれ、こちら側でも新たな発見が生まれます。教えることによって、学ぶことも多い。私自身の研究生活にも役立っています。

学生たちは皆とても真面目で、真剣にリサーチに取り組んでいます。彼らが将来手にするのは、UNUの学位と修了証明書ですが、就職に際しては、彼らの能力が幅広く認められることでしょう。

今現在、日本の学生たちに知名度が低いようですが、まだ始まったばかり。国連大学グローバル・セミナー湘南の学生にも90名以上の学生が参加していますから、彼らを通じて日本人の間でも国連大学大学院のことが知られていくようになると思います。

——大学院生へのアドバイスはありますか？

**ポポフスキー**：大学院の勉強は、最終的にはひとつのトピックに絞るので、自分のプランをしっかりと固めなければなりません。頭の中で常に問いかけをし、その答えが見つからない場合、大学院に入って回答を探し出すのです。そしてUNUはその手助けをしてくれるところです。



# 国連大学・国連職員

## これが得意というものを

高須直子 さんインタビュー

■取材：早稲田大学社会科学部 2年生 陳 利揚

■構成：jFUNU

国連大学本部の建物内には、数多くの国連機関の東京事務所が入っている。その中のひとつ国連開発計画（United Nations Development Programme=UNDP）の東京事務所で働く高須直子さんにインタビューをしたのでそれをレポートにまとめた。

高須さんは、英語が好きだったことに加えて、将来は漠然と国連で働きたいと考えて神田外語大学（千葉県・千葉市）に入学した。当時、国際協力といっても、現在のように豊富な情報や選択肢には乏しい中、高須さんの国連志望も確固たるものではなかった。ただ、在学中に初めて訪れる外国の地としてニューヨークを選び、一か月の語学研修中、国連本部を見学したり、課題のリサーチペーパーのトピックにUNDPを選んだりした。

大学卒業後、半官半民の（株）日本国際協力機構（JAIDO）に勤める。例えば、伊藤忠商事が現地企業との合併会社を設立し、中国・青島にりんごジュースの工場をたちあげる際の投融資を行うなど、途上国の雇用の創出や現地中小企業の育成を手がけた。

2年間の東京勤務後、3年目に研修生としてワシントンD.C.の世界銀行グループの国際金融公社に派遣され、途上国における民間セクター支援を徹底的に学んできた。世界各国から集った人々と働き、女性も自由に発言できる雰囲気や実力主義のシステムなど、1年弱の研修はとても貴重な体験だったそうだ。

その後、高須さんの胸に本格的に国際機関で勤務し、「開発」に携わっていききたいという思いが強くなっていく。JAIDOでの途上国の民間セクター支援も面白かったが、貧しい人たちが助けを必要としている人たちに直接的に貢献できる仕事もやりたい、と考えたからである。

そこで、マニラの大学院で開発マネジメントの修士号を取得することにした。先進国の大学院で学位を取る道もあり、実際イギリスの大学院にも合格していたが、あえてマニラを選んだのは、途上国の人々の本音に接したいという理由からだった。開発をやろうと思ったら途上国の人間の生の声が届く環境にいななければならない。欧米に眼が向きがちな普通の人と比べると、この辺、高須さんが真に途上国に寄り添っていかうとしていた覚悟が伝わってきた。

その後、ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー

（JPO）としてUNDPパキスタンに派遣された。

2005年、そのパキスタンでの2年間の勤務を終えて戻ってきた5日後に、当地で巨大地震が起きた。死者が7万人を越えるという未曾有の大災害。仲間は怎么样了？高須さんはいてもたってもいられず、パキスタンに戻り、UNV（国連ボランティア）として奔走する。そこで行ったのは、ボランティアの採用と管理。ボランティアといっても、電気工や医者、キャンプマネージャーなどその道のプロフェッショナルである。彼らを国連諸機関、地方政府、NGOに派遣し、緊急援助・復旧にあたるのが務めだ。災害直後にパキスタンでのUNVの活動をゼロから立ち上げたため、約2年間、肉体的・精神的にも緊張の連続だった。現場で働くボランティアが二次災害等の危険にさらされていることが、プログラム・オフィサーとして自分自身へのストレスにつながった。深夜2時でも電話がかかってくることも頻繁にあったという。

2008年から約2年半のUNDPイラク事務所での勤務の後、現在は東京に腰を据え、主に日本政府などとのパートナーシップ強化に携わる業務をしているとのこと。

国際協力や国際貢献に興味がある私へのアドバイスを求めると、自分が自信をもてる何かを身につけること、今自分がいる場所で目標をはっきりさせて、達成することが大切。明確な目標を作っ

て「私は●●を自分で計画してやりました」と言えることが重要だといわれた。

国際機関に勤める友人の言葉を引用し、「国連に入りたいが、何を勉強すればよいか」というのは「オリンピックに出たい。どのスポーツをやったらいい？」といっているようなもの、と言われた。「私はこれが好きだし、得意だ、というものを作らなければ」、という高須さんのことばが耳に沁みだ。

◆ ◆  
エネルギーで自分の信念を貫いてきた様子がかがえる高須さん。最前線で活躍している方の経験談をお聞きして、その自信に感動した。私自身、「やはりこうした道に進みたい。国際協力に貢献したい」という思いが強まった。



高須さん（右）とインターンの陳さん（左手前）



## ウ・タント記念講演

9月12日、コロンビア共和国のファン・マヌエル・サントス・カルデロン大統領を迎えてウ・タント記念講演が行われた。本講演は、米州開発銀行（IDB）アジア事務所、およびコロンビア貿易振興機構（Proexport Colombia—観光・海外投資・輸出促進機関）の後援により、国連大学が日本学術会議と共同で開催したもの。

サントス大統領は、その政治家としてのキャリアの中で、コロンビアの初代貿易大臣として、さらに財務大臣や国防大臣として、数々の省庁を率いてきた。国防大臣就任中は、コロンビア革命軍＝人民軍（FARC）に対する重要な施策を指揮し、政府の民主的安全保障政策の実施を先導した。著作も複数あり、そのひとつが国防大臣在任中にFARCのテロリストグループに対して実施された最重要対策に関する『テロの抑止（Check on terror）』である。またジャーナリストやコラムニストとしてメディアの世界でも活躍されており、この分野における傑出した経歴が評価を受け、スペイン国王賞を受賞された。

講演では主に、経済成長の促進に寄与する政策について、またコロンビアと同様の過程にある他の国にも言及された。

## POPsに関するストックホルム条約の10年と今後

国連大学では、10月25日に、国際会議「残留性有機汚染物質（POPs）に関するストックホルム条約の10年と今後」を開催した。国連大学はこれまで島津製作所と協力し、アジア地域を対象として環境汚染物質のモニタリングを行い、適正に管理することを目的として、POPs関連の研究活動強化や高等教育の支援を行ってきた。

シンポジウムでは、明治大学の北野大教授をはじめ、ストックホルム条約事務局、環境省、国立環境研究所、国際連合工業開発機関（UNIDO）のPOPsに関する専門家が、条約採択から10年間の動き並びに今後について講演・報告を行った。またアジアにおけるPOPs関連の研究成果について、農業環境技術研究所、中国環境分析測定センター、ハノイ大学、韓国海洋研究所等の研究者から講演がなされた。ゲストスピーカーはそれぞれの発表の中で、ストックホルム条約に関連したPOPs管理、POPsのモニタリング、環境負荷低減のための利用可能な技術等についても述べた。

## アフリカの持続可能な開発のための高等教育の役割

国連大学サステナビリティと平和研究所（UNU-ISP）では、10月13日（木）に国際シンポジウム「アフリカの持続可能な開発のための高等教育の役割」を開催した。

「持続可能な開発のための教育のための10年」（2005年-2014年）、「ミレニアム開発目標」（2001年-2015年）の最終年が近づきつつある中、持続可能な開発の実現に向けて多様な課題に直面しているアフリカに世界の注目が集まっているが、近年は、これらの国の高等教育機関が、未来のプロフェッショナルを育成するために教育・研究プログラムを抜本的に改善する必要が強く認識されている。この通称ESDAプロジェクト（Education for Sustainable Development in Africa）には、日本政府、国連環境計画（UNEP）、国連人間居住計画（UN-

HABITAT）、国連教育科学文化機関（UNESCO）、日本および北欧の数大学も側面支援のため参加しており、これまでに「アフリカ農村地域の総合開発」、「アフリカの都市化」、「アフリカの鉱物資源管理」の三つの課題別修士課程プログラムを完成させた。このシンポジウムでは、これらの修士プログラムの主な内容と実施計画について報告するとともに、アフリカ側大学グループがプログラムの実践段階に進むための支援について率直な意見交換がなされた。

## 国連大学・横浜国立大学・国連大学協力会 共催シンポジウム

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、巨大津波災害によって、沿岸の多くの都市・地域、施設が甚大な被害を受けた。

生物多様性喪失による生態系の機能の低下は、こうした地震災害や気候変動に伴い顕在化している極端な気象などに対する脆弱性をもたらし、被災するリスクが高まるなど、地球環境問題の深刻化と災害リスクの増大が強く関連している。この重要課題の解決に向けて、11月26日に開催された本シンポジウムでは、地球環境問題が深刻化する中で、「環境・防災をトータルに考えたこれからの持続可能なリスクマネジメント」をテーマとして取り上げた。

リスクの高まりをふまえ、これまでのリスクを抑え込む考え方から、ある程度許容し、共存する考え方へとパラダイムをシフトするとともに、人口減少・超高齢化、グローバル経済の進展もふまえ、生態系が持っている多機能性や回復力を活かすリスクマネジメントの方向性と課題について考えた。

また本シンポジウムでは、基調講演、特別講演で基本的な考え方を明らかにした上で、生態系の荒廃が進む中、200年に一度の大地震が予測されている「神奈川流域圏の具体例」を取り上げて、その実態と最新の先駆的取り組みを報告し、さらに海外のサテライト大学とも結んで、議論を深めた。

12月16日に「UNU/jfUNU ジュニア・フェロー・シンポジウム 2011 人間の安全保障」を開催します。

従来、『安全保障』の問題は、「国家間の問題」と捉えられてきましたが、近年では、個人に対するさまざまな脅威、すなわち環境破壊や人権侵害、難民、感染症、食物汚染、貧困等を防ぎ、「人間個々の安全を保障すべきである」という新しい概念が加わってきています。近年における人間の安全保障をめぐる状況を踏まえ、このシンポジウムでは、人間の安全保障の概念が国際法に及ぼす影響を中軸として、自然災害、平和構築、教育開発など多様な観点からのアプローチを試み、人間の安全保障について新たな展開を探ります。

- 日時：2011年12月16日（金） 13:30-17:15
- 場所：国際連合大学 ウ・タント会議場
- 主催：国連大学サステナビリティと平和研究所、公益財団法人国連大学協力会

お申込み、詳細は本法人のウェブサイトから

